

セルジューク朝における王権の一考察 —フトバの政治的役割—

後藤 敦子*

The kingship under the Seljūqs:
The political function of the *khutba* (sermon at Friday prayer)

GOTO Atsuko

Abstract

This paper analyses the function of the *khutba* (sermon), which was addressed with the Sultan's name on the *minbar* (pulpit) in mosques during Friday prayers in the Seljuq period (1038–1194). The *khutba* has been studied as a sovereign's privileged symbol. Here, I enumerate the political aspects of the *khutba* and chronologically investigate them through the following three stages: (1) from Tughril Bek's conquest of Central Asia and Eastern Iran to enter Baghdad, the capital of the Abbāsid dynasty (1055), (2) from 1055 to the death of Sultan Malik Shāh (1092), (3) from 1092 to the collapse of the Great Seljūqid dynasty (1157).

The conditions concerning the *khutba* changed over the course of time, including aspects related to who had the right to announce one's name in the *khutba* and who permitted whom to mention one's name in it. The relations between the Abbāsid Caliph and the Seljuqid Sultan also underwent a transformation. During the early period, the *khutba* with the names of the Abbāsid Caliph and Seljūqid Sultan authorised the Sultan's legitimacy in the Islamic world. However, later, when several Sultans fought each other for succession, the *khutba* in the Sultan of Baghdad's name was used as an important political instrument to demonstrate who the current Sultan was.

Keywords : Seljūqid dynasty, 'Abbāsid dynasty, Religious rituals, Friday sermon, *khutba*

はじめに

セルジューク朝（1038-1194）は、遊牧オグズ族の族長セルジュークが10世紀末にスンナ派のイスラームに改宗し、徐々に西方に勢力を拡大していったテュルク系遊牧民の部族（グズとよばれる）によって建国された王朝である。1055年にセルジューク朝スルタン・トゥグリル・ベク Tughril Bek（在位1038-63）が、アッバース朝（750-1258）の首都バグダードに入城し、カリフ・カーイム al-Qa'im（在位1031-75）により、フトバにおいてカリフに次いでスルタンとして名前を読み上げられるようになった¹。中世イスラーム世界においては、カリフの王権の権限として次の四つがあげられる。一つ目は金曜日正午の集団礼拝や二大祭時などの礼拝の際の説教フトバ *khutba* の権限、二つ目は貨幣に支配者の名を打刻するスィッカ *sikka* の権限、三つ目はラカブ *laqab*（尊称）授与の権限、四つ目は礼拝などに支配者の住居の門上での太鼓やラッパなどの楽団演奏ナウバ *nawba* の権利²である³。四つの王権の象徴は、アッバース朝からの慣習であったが、セルジューク朝もこれらの王権の

キーワード：セルジューク朝、アッバース朝、宗教儀礼、金曜礼拝、フトバ

*平成27年度入学生 比較社会文化学専攻

象徴システムにとりこまれていく。

フトバについての研究において、佐藤次高は、アッバース朝全盛期からエジプトのマムルーク朝（1250-1517）までの事例をあげ、支配者が就任する際のバイア（忠誠の誓い）は支配者と被支配者間の双務的契約、フトバはバイアによって承認された王権を週毎に確認する儀礼であり、そのフトバが行われるモスクに集まる地域住民の総意によって、王権の追認や否認が行われていたとし、ダウラ（国家）はバイアとフトバが及ぶ範囲であることを示した。また、被支配者が征服者の名をフトバに掲げることによって、権威者や権力者の庇護下に入り、それを後ろ盾にして自らの地位の保全をはかることがあり、フトバが単なる宗教儀礼ではなく、政治的動向と密接に絡んでいることを示した⁴。清水宏祐は、セルジューク朝支配体制は、征服地の既成の支配体制を認め、フトバでセルジューク朝への服従を示させ、貢納させる体制であり、フトバでは最初にカリフの名、次にスルタンの名、最後に地方王朝の君主の名が唱えられたとし、フトバにおける征服・被征服の関係性の表明という役割を指摘する⁵。SandersとWalkerの研究は、フトバの研究としては参照すべき点が多く見られるが、主にイスマール派のファーティマ朝（909-1171）下に特化してエジプトにおけるフトバの宗教的な側面をとりあげたものである。具体的な政治事件と王権にまつわるフトバの更なる事例研究が必要とされている。

本稿では、王権の象徴としてのフトバを、セルジューク朝の創設期（バグダード入城まで）、支配領域拡大期（王朝最大版図⁶を支配した第3代スルタン・マリク・シャー Malik Shah（在位1072-92）まで）、その没後のスルタン位継承争いが断続的に起こる12世紀はじめの分裂期までの三つの時期にわけ、その時々々のアッバース朝、その他の地方王朝との関係性や、セルジューク朝内の権力闘争とフトバの役割や意味の変化から、支配体制の形態を分析し、王権の象徴としてのフトバの変容を明らかにする。事例は数多くあるので、紙幅の関係上対象を絞らざるを得なかったことをお断りしておく。

本稿で用いた史料と略称は次のとおりである。

Bayhaqī: Abū al-Faḍl Muḥammad ibn Ḥusayn Bayhaqī (d. 1077?), *Tārīkh-i Bayhaqī*, Tehran, 1989.

Ḥusaynī: Ṣadr al-Dīn Abū al-Ḥasan, ‘Alī b. Naṣīr al-Ḥusaynī (没年不詳), *Zubdat al-tawārīkh: akhbār al-umarā’ wa al-mulūk al-Saljūqīya* 『歴史の精髓』, Beirut, 1985.

I.A.: Abū al-Ḥasan ‘Alī, Ibn al-Athīr (d.1234), *al-Kāmil fī al-tārīkh* 『完史』, ed. C.J.Tornberg, 13 vols, Leiden, 1853, rep. Beirut, 1979-82.

M.Z.: Sibṭ b. al-Jawzī, *Mīr’āt al-zamān fī ta’rīkh al-a’yān* 『時代の鏡』, Ankara, 1968.

Māwardī: ‘Alī ibn Muḥammad Māwardī (d. 1058), *al-Aḥkām al-sultānīya wa al-wilāyā al-dīnīya*, Kuwait, 1989 (電子ファイル) (日本語訳: アル=マーワルディー著; 湯川武訳 『統治の諸規則』 慶應義塾大学出版会, 2006)

Muntaẓam: Abū al-Faraj, ‘Abd al-Raḥmān Ibn al-Jawzī (d.1201), *al-Mutaẓam fī ta’rīkh al-mulūk wa al-umam* 『歴史の秩序』, vols. 5-10, Hyderabad, 1938-39.

Rāwandī: Rāwandī, Muḥammad b. ‘Alī b. Sulaymān (d.1204-05), *Rāhat al-ṣudūr wa āyat al-surūr* 『胸臆の安息』, ed. Muḥammad Iqbal, Tehran, 1954.

Rusūm: Abū al-Ḥusayn Hilāl al-Ṣābī’ (d.1056), *Rusūm dār al-Khilāfa*, Beirut, 1986. (日本語訳: ヒラール・サービー著; 谷口淳一, 清水和裕監訳 『カリフ宮廷のしきたり』 松香堂, 2003)

S. M.: Nizām al-Mulk, (d.1092), *Siyar al-mulūk* 『統治の書』 (Shirkat-i Intishārāt-i ‘Ilmī va Farhangī; 75), Tehran, c1994 (日本語訳: ニザーム・アルムルク著; 井谷鋼造, 稲葉穰訳 『統治の書』 (イスラーム原典叢書), 岩波書店, 2015)

1. アッバース朝における王権の象徴としてのフトバ

フトバは、ジャーミウ（金曜礼拝のための大モスク）のミンバル（説教壇）で行われ、コーランの引用を含む説教時に「このフトバをカリフと支配者某の名において読む」という形式で行われた⁷。これにより、毎週金曜日に支配者は礼拝参加者によって支配を追認された。フトバを実行する者はアッバース朝初期にはカリフ自らであったが、のちにハティーブ（説教師）が実施するようになった。ハティーブは場合によってはイマーム（礼拝

の導師)が兼任することもあった。

次に当時のウラマー(知識人)による礼拝とイマームとハティープについての議論をみてみよう。アッバース朝カリフ・カーディル al-Qādir (在位991-1031)に仕えた政治思想家のマーワルディーの『統治の諸規則』に、礼拝のイマームの任務について「礼拝のイマーム(導師)は三種類に分れる。第一は、日常の五回の礼拝のイマーム。第二は、金曜日の集団礼拝のイマーム。第三は、これ以外の、シャリーア(イスラーム法)によって推奨される礼拝[二大祭、日食、月食、雨乞い]のイマームである。(中略)支配者のモスクとは支配者(sultāniya)の臣下たちが保護監督する、大規模で多くの人々が集まるモスクや、ジャーミウやマシュハド(聖廟)などである。そのようなモスクでの礼拝のイマーム職は、支配者が任命して、そのイマーム職が委任された者だけに限られる。それは、支配者から委任された職務を怠らないようにするためである。(中略)金曜日の集団礼拝は、都市(ミスル)であれ村であれ、冬も夏も定住していて、必要なとき以外はそこに留まっている人たちで、集団礼拝ができるだけの人口をもつ集住地においてしか行われぬ。(中略)二大祭の礼拝はフトバの前に行われ、普通の金曜礼拝はフトバの後に行われる。これはそれぞれの慣行(スンナ)に従ってのことである」⁸と書いており、金曜礼拝をとりおこなうイマームが支配者によって任命されること、金曜礼拝が実施される場所は人口が集中している都市であること、礼拝の式次第においてフトバがどの時点で行われるべきなのかを述べている。

また第2代スルタン・アルプ・アルスラーン Alp Arslān (在位1063-72)と続くスルタン・マリク・シャーのワズィール(宰相)として仕えたニザーム・アルムルク Nizām al-Mulk (d. 1092)が著わした『統治の書』「第6章カーディー(裁判官)、ハティープ、ムフタスィブ(市場監督官)、および彼らの仕事の重要さについて」においては、「帝王は金曜モスクで礼拝を行うハティープを選ぶ」⁹とあり、やはり礼拝を実行するものは支配者によって選ばれるとある。これらのことから、礼拝にともなうフトバにおいても、当時の支配者による政治的影響が及んでいることが推測される。

セルジューク朝のバグダード入城以前にバグダードを支配下においていたブワイフ朝(932-1062)に書記として仕えていたヒラル・アッサービーが著わした『カリフ宮廷のしきたり』にはフトバに関する章が2章ある。第15章「説教壇におけるフトバ」において、「最初の頃は、フトバでは神への頌詞とムハンマドへの祝福を繰り返した後、次いでカリフについて言及されるのみであり、カリフに仕えるアミール(軍司令官)が語られる習慣はなかった。(中略)ブワイフ朝のアドゥド・アッダウラ 'Adud al-Dawla [大アミール、イラク支配978-83]がバグダードに到来し、物事を掌握し、あらゆる人々がなびいたとき、説教師ハールーン・ブン・アルムッターリブは、ルサーファ地区の集会モスクにおいて「その恩寵によって称賛され、天地で崇拝される神にたたえあるかな。神は彼らにイマーム=ターイ al-Tā'i [カリフ、在位974-91]というカリフと、彼の「'Adud al-Dawla(王朝の力)」、「Taj al-Milla(宗教の冠)」にしてカリフ位の避難所たるアミール達の長に関する彼(ターイ)のお考えの美しさをお与えくださった。(中略)彼(アドゥド・アッダウラ)はモスクを建て、運河を掘り、全ての都市をよくするようにつとめ、夜も昼も神の権利を実行した。[コーラン第9章18節引用](後略)」と説教した。このフトバはハールーン・ブン・アルムッターリブが何の根拠もなく行ったのであった。アドゥド・アッダウラはそれを知り、ターイに書簡を送って、ハールーンにフトバにおいてアドゥド・アッダウラに言及することを命じるように求めた。そこでターイは求めに応じた」¹⁰。

これによると、フトバにおいては、神、預言者ムハンマド、カリフ、大アミールの順番で言及される。946年のブワイフ朝のバグダード入城後、ブワイフ朝君主の名前がカリフに次いでフトバで追加されるようになったのである。しかしアッバース朝カリフは軍事的支配者のブワイフ朝大アミールの政治的庇護下にあったものの、バグダードにおけるフトバについてはカリフの許可を得る必要があったことから、フトバの実行のような宗教的な権限はカリフが保持していたことが明らかである。

2. 王朝創設からバグダード入城まで(1030-55)

セルジューク朝のトゥグリル・ベクは、兄のチャグリー・ベク・ダーウードと協力して、部族集団を率いて西方に勢力をのぼし、諸都市を武力的に支配下に置き、支配領域を拡大していく。

1030年にガズナ朝(977-1186)のマフムード Mahmūd (在位998-1030)が没し、後継者争いが発生すると、こ

の機に乗じてトゥグリル・ベクはチャグリー・ベクとともにガズナ朝の支配領域に侵攻する。チャグリー・ベクはトゥグリル・ベクによりニーシャープールからサラフスに送られ、バルフをのぞくホラーサーン一帯を支配した。その後、マルヴに入り住民を安堵し、1037年4月22日（428年ラジャブ月の最初の金曜日）に彼の名前でフトバが実施された。このフトバにおいて彼はMalik al-Mulūk（諸王中の王）というラカブが与えられた¹¹。1038年にはトゥグリル・ベクと兄弟のチャグリー・ベクはニーシャープールの無血入城を果たし、ガズナ朝の君主マスウード Mas'ūd（在位1030-41）がインド遠征のため不在の時、トゥグリル・ベクのいとこのイブラーヒーム・イナル Ibrahim Inalがトゥグリル・ベクの代理を名乗り、ニーシャープールの開城を勧告した。当時悪政のために新しい支配者が期待されており、トゥグリル・ベクのフトバが実施されたのであった¹²。これらのフトバはセルジューク朝側からの強制ではなく、貢納と引き替えに庇護下に入ることを期待して、支配者としてセルジューク朝の名前をフトバに入れたものであった。一方ちなみにトゥグリル・ベクはニーシャープールでのフトバにおいて、al-Sultān al-Mu'azzam（偉大なるスルタン）と呼ばれたという¹³。1040年にはセルジューク朝はガズナ朝のマスウードの軍をダンダーナカーンの戦いで破ってホラーサーンの支配を固めた。1046-47年（439年月不明）には、トゥグリル・ベクがイスファハーンを包囲すると、イスファハーンの支配者は金（māl）を支払い、トゥグリル・ベクの名前でフトバを実施している¹⁴。その後、トゥグリル・ベクの征服地において彼の名前でフトバが行われる。例をあげると、1054年にシーラーズにおいてはブワイフ朝の二人の大アミールの名前に先立ちトゥグリル・ベクの名前でフトバが実施され¹⁵、セルジューク朝がブワイフ朝の優位に立ったことを示す。アゼルバイジャンとタブリーズにおいても、被征服者がトゥグリル・ベクに忠誠を誓い、彼の名前でフトバが実施された¹⁶。

一方、トゥグリル・ベクを族長とするセルジューク家の遊牧オグズ族は、勢力をイラクにも伸張させていた。トゥグリル・ベク兄弟とは別行動をとり、モスルで略奪を働いていたオグズ族が1029年にカリフ、次いでトゥグリル・ベクの名前でフトバを実施した¹⁷。これはカリフ、トゥグリル・ベクの権威を利用し、自らの略奪行為を正当化しようとしたものと推測される。チグリス・ユーフラテス河流域に勢力を保持し、モスルを根拠地としていた遊牧アラブのウカイル族¹⁸のクライシュは、1054年にはアンバールを占領し、ここでセルジューク朝のトゥグリル・ベクを支配者と認めるフトバをよみあげた¹⁹。これはセルジューク朝の庇護下に入ることを示すが、結果として遊牧オグズ族によって領地を荒らされるのを防ぐこととなり、フトバが地域支配に利用されたことを示すのである。

3. 支配領域拡大期（バグダード入城からマリク・シャーの暗殺まで、1055-92）

1055年トゥグリル・ベクがバグダードに入城したことは歴史的な大事件と捉えられているが、カリフの要請によるものなのかスルタン側が入城許可を求めたものなのかは史料によって記述が異なる²⁰。フトバとスィッカの実施についても同様である。

『歴史の精髓』においては、カリフ側が入城以前にフトバ、スィッカ、ラカブ al-Sultān Rukn al-Dawla Abū Ṭalib Ṭughril Bag Muḥammad ibn Mikā'il Yamīn Amir al-Mu'minin（スルタン＝王朝の柱、（神の）探究者の父、トゥグリル・ベク・ムハンマド、信徒たちの長＝カリフの右手）を命じたと記述される²¹。『完史』においては、1055年12月15日（447年ラマダーン月最後から8日目の金曜日）にカリフがバグダードの複数のモスクでフトバにおいてトゥグリル・ベクの名前が唱えられるように命じた²²とある。

1063年トゥグリル・ベクが死去すると、『時代の鏡』によれば、カリフがスルタンのフトバ（khutba al-Sultān）の停止を命じた²³。そして彼の死亡記事には、1055年にバグダードに入城し、カリフ・カーイムからヒルア（名誉の外衣）を賜り、フトバにおいてはMalik al-Mashriq wa al-Maghrib（東と西の王）と唱えられたとある²⁴。『完史』には、同時期の記述として、1063年 トゥグリル・ベクが死んだ時、トゥグリル・ベクがすでに自分の後継者としていた（'ahd ilayhi bi-al-mulūk）いとこの息子のスライマーンがすえられた。スライマーンのフトバが唱えられたが、アミール達に意見を異にする者がいて、トゥグリル・ベクの甥のアルプ・アルスラーンを支持するフトバが唱えられた²⁵。そして1064年にカリフがアルプ・アルスラーンにスルタン権を叙任した²⁶。

1064年フトバがアルプ・アルスラーンの名において行われた。そこでは「おおアッラーよ、al-Sultān al-

Mu‘azzam Shāhanshāh … Amīr al-Mu‘minī (偉大なるスルタン、諸王の中の王、…信徒たちの長)に幸運あれ]と呼びかけられた。

1069-70年には、メッカでカリフ・カーイムとスルタン・アルプ・アルスラーンの名でフトバが行われ、ファティマ朝のためのフトバは中止された²⁸。1071-72年にはアレppoでカリフとスルタン・アルプ・アルスラーンの名でフトバが唱えられた。その理由は王朝の威力を認識したからであった。[サーヒブ(総督)]のマフムードはアレppoの人々を集め、「これは新しい王朝(dawla)であり、強い王国(mamlaka)である」と言った²⁹。このように、アルプ・アルスラーンの名のフトバはイラクからシリア、アラビア半島と広範囲にわたるようになったのである。

1073年アルプ・アルスラーンの死後、王朝は息子のマリク・シャーの手にゆだねられた。マリク・シャーは彼に対するフトバを要求する使者をバグダードに送り、彼に対するフトバがバグダードの複数のモスクで行われた³⁰。

マリク・シャーは支配領域拡大のための遠征活動を継続するが、1089-90年にカシュガル遠征を実行し、ユーズカンド(フェルガナ地方のウズケント)に到達し、フトバとスィッカを要求する使者を送った。もし服従しなければ、侵攻すると脅されたユーズカンドの支配者はこれに応じ、敬意をもってスルタンを出迎え、贈り物をし、治安を回復したという³¹。マリク・シャーは1092年に37歳の若さで急死する。彼の死亡記事には、フトバで彼の名前が唱えられた範囲は、中国の国境(hudūd al-Šīn)からシリアの境界まで、イスラーム世界(bilad al-Islam)の最北からイエメンの境界までとなり、ビザンツ帝国の支配者も貢納(jizya)していたと記されている³²。

4. 王朝分裂期(マリク・シャー没後のスルタン位継承争い、1092-1157)

『胸臆の安息』の系図によると、マリク・シャーには名前が判明している息子が8人存在していた。『完史』には生前に自分の後継者を選定していた記事がある。1087年に彼の息子アブー・シュジャー・アフマド Abū Shuja‘ Aḥmadを後継者(walī ‘ahd)として任命し、Malik al-Mulūk(諸王の中の王)、『Aḥd al-Dawla(王朝の力)、Tāj al-Milla(宗教の冠)、『Uddat Amīr al-Mu‘minīn(信徒の長の頼みの綱)のラカブを与え、バグダードのフトバにおいて彼の名前を唱えるようにカリフに使者を送り、その年の11月には実行されていた³³。しかし実際にはマリク・シャーが死去すると、彼の妻テルケン・ハトゥン Terken Khatunは、夫の死を隠し、ひそかに4歳の息子のマフムード Maḥmūdを擁立しようと策謀をめぐらす。彼女はカリフ・ムクタディー al-Muqtadi(在位1075-94)に息子の名前でフトバを実施するように書簡を送り、フトバが実施され、Naṣir al-Dunyā wa al-Dīn(現世と信仰を助けるもの)のラカブも与えられた。1092年11月には両聖都(メッカとメディナ)でも彼の名前でフトバが実施された³⁴。また、マリク・シャーには別妻ズバイダ Zubaydaの長子バルキヤールク Barkyaruqがいたが、テルケン・ハトゥンは継承争いを恐れ、イスファハーンで彼を捕らえた。しかしマリク・シャーのワズィールのニザーム・アルムルク³⁵がバルキヤールクの支持者として彼を解放し、イスファハーンでスルタンとしてバルキヤールクの名でフトバが唱えられた³⁶。1094年にはマフムードが早世するが、バグダードでスルタン・バルキヤールクのフトバが唱えられた。これは前年バルキヤールクがカリフ・ムクタディーにフトバを要求し、その要求が受け入れられたもので、Rukn al-Dīn(宗教の柱)というラカブも与えられた。またこの時、ヒルアがカリフのワズィールによってバルキヤールクに与えられた³⁷。

一方、マリク・シャーの弟トゥトウシュ Tutushもスルタン位継承争いに加わっていた。1093年にバグダードでカリフに対してスルタンとしてのフトバを要求した³⁸。1094年にアレppo、ジャズィーラ、ディヤールバクル、アゼルバイジャン、ハマダーンの支配を確立し、カリフに要求し応諾を得、バグダードでのフトバを実行したが³⁹、翌年にはバルキヤールクに敗退し戦死した。

この後継者争いにはマリク・シャーの別妻の息子のムハンマド Muhammadとその弟サンジャル Sanjarもさらに加わる。1099年にはバルキヤールクのバグダードでのフトバが中止され、ムハンマドの名が唱えられる⁴⁰など、1104年のバルキヤールクとムハンマドの和約まで、何度も両者のフトバの中止と復活、和約の記事が史料中に見られる⁴¹。1101-02年にバルキヤールクのフトバが中止されると、セルジューク朝の他のスルタンのフトバも

なくなり、カリフ以外のフトバが制限される⁴²。

1104年にはバルキヤールクとムハンマドの和約が結ばれ、支配領域の確認のため、フトバの範囲が決められた⁴³。それによると、バルキヤールクは、ライ、ジャバル、タバリスターン、フージスターン、ファールス、ディヤールバクル、ジャズィーラ、ハラマイン（両聖地メッカとメディナ）、ムハンマドは、アゼルバイジャン、アッラーンの町、アルメニア、イスファハーン、イラク（タクリートをのぞく）、サンジャルは、ホラーサーン、つまりグルガンからマーワラーアンナフル（トランスオクシアナ）までとされたが、そこではサンジャルと兄弟のムハンマドの名前でフトバが実行された。

しかし、マリク・シャーの孫世代になるとフトバの実施領域も変化する。1104年12月にバルキヤールクが25歳で死亡すると、イラクはムハンマドの支配領域であったはずであるが、1105年1月に彼の息子のマリク・シャー2世のフトバがバグダードのディーワーン（官庁）で行われ、翌日金曜日にはバグダードの複数のモスクでもフトバが実施された。彼には祖父マリク・シャーと同じラカブ Jalal al-Dawla（王朝の輝き）などが授与されたが⁴⁴、このマリク・シャー2世もこの年に早世した。スルタン位は彼の父の兄弟のムハンマドが継承したが、実際は上記の1104年の和約のとおり、支配領域の西部は兄ムハンマド、東部は弟サンジャルが支配した。

1118年にムハンマドが死去し、イラク地方を支配するマフムード2世（在位1118-31）がスルタン位についてから、セルジューク朝はイラン東部を支配するサンジャル（在位1118-57）との間で分割された。1119年にはバグダードにおいて唱えられたフトバでは、名前の順番はマフムード2世よりもサンジャルが先であった⁴⁵。1131年マフムード2世が死去すると、彼の息子のダーウードに対して、ジバル（bilad al-jabal）、アゼルバイジャンでフトバが実施された。スルタン・ダーウード（在位1131-32）はカリフ・ムスタルシド al-Mustarshid（在位1118-35）にバグダードでのフトバの許可を求めて使者を送るが、「フトバについての決定はスルタン・サンジャル次第である」と返答された⁴⁶ことから明らかなように、実質上はサンジャルがセルジューク家全体を支配していた。『歴史の精髓』によれば、サンジャルに対する礼拝（ドゥアー）時の範囲は、ラホールからガズナ、サマルカンド、ホラーサーン、タバリスターン、キルマーン、スィースターン、イスファハーン、ハマダーン、ライ、アゼルバイジャン、アッラーン、バグダード、両イラク、モスル、ディヤールバクル、ディヤールラビーア、シリア、両聖都までであり、スィッカの範囲についても同様であると述べられている⁴⁷。

1157年スルタン・サンジャルが死去すると、バグダードでのフトバからスルタン名が消える⁴⁸。その後イラクにおいて官僚や軍人の派閥争いなどが原因で短命な在位期間のスルタンが支配するが、セルジューク朝の支配権力は衰退していくのである。

まとめ

ここまで三つの時期にわけて王権の象徴としてのフトバの変容の事例を分析してきた。第一期のセルジューク朝の創設期においては、支配地での権威を示すためにスルタン自らが要求したり、支配地を庇護下に置くためにフトバと貢納を条件として平和的に征服したりする例があった。また逆に被支配者がスルタンのフトバを自ら実施し、庇護下に入り貢納を約束した例も見られた。第二期のバグダード入城から王朝最大版図を形成したマリク・シャーの時代においては、カリフ在住のバグダードでのフトバの重要性が意識されるようになり、またフトバ実施の範囲が支配領域と重なる傾向がみられる。第三期のマリク・シャー没後のスルタン位継承争いの時代においては、フトバ実施の焦点が征服地の支配関係からスルタン位の継承問題へ転換していく様相が明らかになった。フトバでスルタンとして名前を唱えられることは王朝全体の後継者を示す、重要な政治的な意味を有していたのである。このように王権の象徴としてのフトバの役割や意味は時代により変容し、王朝の政治状況はフトバに反映されるのである。

ここでアッパース朝カリフとセルジューク朝の関係をあらためて考えてみよう。8-9世紀全盛期のアッパース朝においては、フトバはカリフのみに許された特権であった。ブワイフ朝がバグダードに入城し、カリフによる一元的支配から軍事支配政権へと転換した10世紀以降、バグダードにおけるフトバがカリフからの許可は必要とされるものの、カリフに次ぐ支配者として実施されるようになる。軍人支配者からのフトバの要請をカリフが許可せざるを得ない状況へと変わったのであった。バグダードでのフトバはカリフに次ぐ支配者であることを表

わすことから、テュルク出身のスルタンにとって敬虔なムスリム君主であることを表明することができる絶好の機会であった。フトバにおいては、同時にパイアの誓いや、ラカブやヒルアの授与が行われることもあり、アミールや、ワズィールなどの官僚にとっても褒賞、権威の授与の機会でもあった。フトバの実施状況はカリフやセルジューク家の有力者の権力動向に影響され、支配領域の確認にも利用された。これらはフトバが単なる王権の象徴ではなく、実質的な支配の承認という政治的役割を持っていたことを如実に表している。

なぜセルジューク朝のスルタンはバグダードでのフトバに固執したのであろうか。バグダード入城以前は、彼らはカリフからの許可を得ることなく諸都市で自らの権威を示すためにフトバを実施していたが、セルジューク朝のイラク侵攻の知らせがカリフ側に伝わると、最初はカリフの要請でセルジューク朝の支配者名でのバグダードにおけるフトバが実施されるようになった。しかしスルタン位をめぐる内紛が頻発した時期にはセルジューク朝側から要求することが多くなり、カリフから許可される側にまわる。スルタンが死ぬとその後継者から要請されない限り、次代スルタンの名を唱えるフトバは実施されなかったし、後継者争いの際には、スルタンとしての正当性、権威の象徴としてセルジューク朝側からフトバを要求するが、許可されないこともしばしば見られた。ここからはアッバース朝カリフとセルジューク朝スルタンの関係にも、フトバを要請する側から要求を許可する側への力関係の逆転現象がみてとれる。なお、バグダードのフトバからカリフの名前が省略されることはなかった。カリフの権威は絶対不可欠な存在であり、王権の正当性の柱であったのであろう。確固とした政権を維持するためには、軍事的支配者はスンナ派イスラーム世界の信徒の長であるカリフからの承認を獲得することで権威づけを行い、フトバを通じて自らの支配の正当性を公にする必要があったと考えられる。

【註】

- 1 I.A. 9: p.105.
- 2 後藤2000: pp.115-125にブワイフ朝、セルジューク朝時代のノウバの事例と分析がある。
- 3 佐藤: pp.170-171.
- 4 佐藤: pp.159-162.
- 5 清水: p.16.
- 6 図1の11-12世紀のセルジューク朝支配領域を参照。
- 7 Wensinck: [1913-] 1993, pp.980-981. *The encyclopaedia of Islam (new edition)*も同内容である。
- 8 Māwardī: pp.170-178.(日本語訳: pp.242-259)
- 9 S.M. p.60. (日本語訳: p.53), トルコ系遊牧民君主にペルシア帝王の理想の君主像を教授した書である。
- 10 Rusūm: pp.135-137. (日本語訳: pp.135-137)。ブワイフ朝のフトバの事例は紙幅の関係上あげられないが、Ibn Miskawayhの *Tajārib al-umam (experiences of nations)* vol. 6, Tehran 2001, p.412等にみられる。
- 11 I.A. 9: p.480.
- 12 I.A. 9: p.481, Bayhaqī 3: p.884.
- 13 I.A. 9: p.481.
- 14 I.A. 9: p.534.
- 15 I.A. 9: p.596.
- 16 I.A. 9: p.598.
- 17 I.A. 9: p.389.
- 18 I.A. 9: p.126. 当時ブワイフ朝とウカイル族は敵対関係にあったが、のちに和約を結ぶ。モスル、クーファなどがウカイル族のイクターであった。
- 19 I.A. 9: p.600.
- 20 『完史』においてはトゥグリル・ベクがバグダード入城許可を求めたとあるが、『胸臆の安息』においては、カリフ側から入城の要請があったと記述されている。後代に世界史として記述された年代記『完史』とルーム・セルジューク朝(1077-1308)のスルタン・カイホスロー1世 Kaykhusrau I (在位1192-96, 1205-11)に献呈するために著わされた王朝史では事件の扱いが異なる。史料の性格の違いを考慮するべきであろう。
- 21 Rawandī: p. 105.
- 22 I.A. 9: p.610.
- 23 M.Z.: p.103.

- 24 M.Z.: p.107.
 25 I.A. 10: p.29.
 26 I.A. 10: p.35.
 27 M.Z.: p.113.フトバの内容が記述されていることは少なく、同時代のファーティマ朝はWalker 2009を、プワイフ朝は『カリフ宮廷のしきたり』を参照した。
 28 I.A. 10: p.61.
 29 I.A. 10: p.63.
 30 Muntazam 8: p. 277, I.A. 10: p.76.
 31 I.A. 10: p. 172.
 32 I.A. 10: p. 211.
 33 I.A. 10: p. 162.
 34 I.A. 10: p. 214.しかしマフムードは天然痘に罹り、1094年に死亡した (I.A.10: p. 235)。
 35 ニザーム・アルムルクはテルケン・ハトゥンと敵対していた。
 36 I.A. 10: pp. 214-215.
 37 I.A. 10: p. 229.
 38 I.A. 10: p.221, Muntazam 8, p.293.この時アミールのアイタキン・ジャップ Aytakin Jabb (没年不明) を、カリフへのフトバを要求するための使者としてバグダードのシフナとして任命した。バグダードのシフナについては後藤1993を参照されたい。
 39 I.A. 10: pp.232-233.
 40 I.A. 10: pp.288-289.
 41 I.A. 10: pp.293-294, 329-333.
 42 I.A. 10: p.356.
 43 I.A. 10: pp.369-370.
 44 I.A. 10: p.382.
 45 I.A. 10: p.553.
 46 I.A. 10: p.674.
 47 Husayni: p.184. Jafarには著者自身が1980年にロンドンで発見し購入したバグダード発行のカリフとサンジャルの名前とラカブが打刻されたコインがみられる。
 48 I.A. 10: p.172.

【主要参考文献】

- Bulliet, Richard W. 1972. *The patricians of Nishapur : A study in medieval Islamic social history*, Cambridge, Mass. : Harvard University Press
 Jafar, Yahya. 2011. *The Seljuq period in Baghdad : A numismatic and historical study*, London : Spink & Son Ltd.
 Sanders, Paula. 1994. *Ritual, politics, and the city in Fatimid Cairo*, Albany : State University of New York Press
 Walker, Paul E. 2009. *Orations of the Fatimid caliphs : Festival sermons of the Ismaili imams : An edition of the Arabic texts and English translation of Fatimid khatbas*, London : I.B. Tauris
 -----, 2012. "Islamic ritual preaching (khatbas) in a contested arena : Shi'is and Sunnis, Fatimids and Abbasids", *Anuario de Estudios Medievales* 42-1, Instituto de Historia Medieval de España, pp.[119]-140.
 Wensinck, A.J. 1954-. "Khatba", *The encyclopaedia of Islam (new edition)*, v. 5, Leiden : Brill, p.74.
 -----, [1913-]1993. "Khatba", *E.J. Brill's first encyclopaedia of Islam 1913-1936*, v. 4, Leiden : Brill pp.980-983.
 後藤敦子. 1993. 「セルジューク朝時代のシフナ職——バグダードを中心に」『イスラム世界』39/40, 日本イスラム協会, pp.23-44+160.
 -----, 2000. 「10-12世紀における王権の象徴に関する一考察——太鼓の用例を中心として」『オリエント』42-2, 日本オリエント学会, pp.112-128(112).
 佐藤次高. 2004. 『イスラームの国家と王権』(世界歴史選書), 岩波書店, viii,213,10p.
 清水宏祐. 1986. 「セルジューク朝のスルタンたち——その支配の性格をめぐって」杉勇, 前嶋信次他(編)『スルタンの時代』(オリエント史講座; 5) 学生社, pp.7-30.



図1：11-12世紀のセルジューク朝支配領域（著者作成）

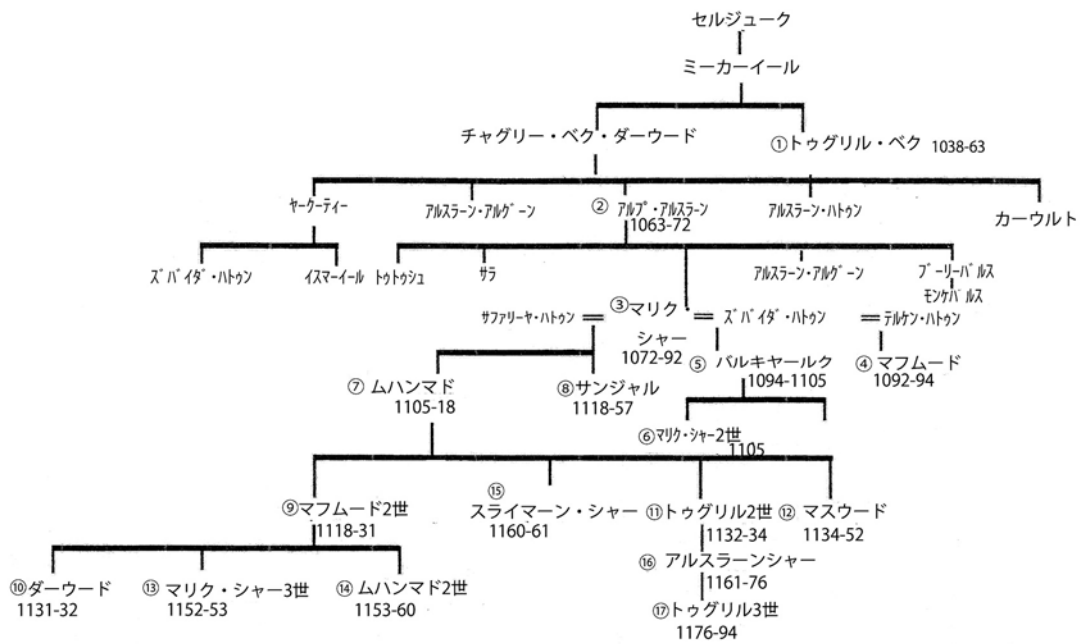


図2：セルジューク朝系図（著者作成）